

ハイデルベルク信仰問答より

問 91 では、よい業とは何ですか。

答え それは、神の律法にかなない、神の栄光のために、真の信仰からなされる業だけです。

今日の間答は、問 92 以降の十戒の解説につながる内容になっています。十戒が信仰者の最も中心的な生き方であるならば、「良い業」を行なうことがそれに当たるとい話になってくるでしょう。問 90 では、新しい人に生まれ変わるにより、人は神を喜び、神の御心に従う「良い業」を切望するようになると言われていました。そのような流れの中で、更に具体的に「良い業」が何であるかを問うているのです。問 91 の答えには三つの要素が出てきます。

- ① 神の律法に適っている
- ② 神の栄光のためである
- ③ 真の信仰からなされるものである

以上の内容をもう少し突き詰めて考えてみましょう。

- ① 神の律法に適っている

律法とは、詩篇でも学んでいるように、「みおしえ」「さとし」「戒め」「おきて」「仰せ」「さばき」「ことば」「約束」などと置き換えることもできます。そもそも「律法」という翻訳に問題があり、本来は「トーラー」(法) でありますから、シンプルに神の法に適う生き方こそが「良い業」であると理解すればいいのです。神が根本的に良いお方であるならば、その方によって定められる法もすべて良いはずですが、戒律として御言葉を聞くと、読者はそれに縛られる感覚を覚えがちですが、トーラーの役割は本来そうではなく、積極的に神に喜ばれる生き方を発見していくために与えられたのです。「これをしてはならない」よりも「何をすればよいか」という思考に切り替えることが大事ではないでしょうか。

- ② 神の栄光のためである

このことが念入りに加えられているところに、人が如何に自分の栄光のために行動しやすいかが暗示されているでしょう。私たちはどういうときに自分の「良い業」を自分の栄光にしてしまうのでしょうか。それは簡単に見分けられます。神ではなく人の目が気になっているときです。神との縦の関係が希薄なまま「良い業」に励んでいる状態は、常に誰かの評価を求める行動へと人を駆り立てます。奉仕者にとって重要なことは、神に没頭することであり、誰にも知られないところで主が喜んでくださることだけを求めて生きることです。そもそも人の評価を求めていないのであれば、比較の対象がないわけですから、心は常に爽やかであることができます。

④ 真の信仰からなされるものである

わざわざ「真の」と言われるのであれば、その対極に「偽の」信仰というものがあるのかもしれない。言い換えれば「偽善」というものになるでしょうか。信仰とは何であるかをもう一度問い直すならば、それは「本来救われ得ない私さえも救ってくださった主イエスを信じること」とも「信じることさえできない私をも救うことができる神を信じること」とも言うことができます。信仰には私たちの側の力は何一つ含まれていないのです。ただ神の愛と恵みによって私たちは罪から救われました。このことを認識すればするほど、私たちはへりくだって生きるようになります。つまり、「真の信仰からなされる『良い業』」とは、ただただ救われた喜びに満ち溢れて行動することを意味します。無条件に救ってくださった主に、無私の心で仕える。「惜しみなく与えた主に、惜しみなくささげよう」と歌いながら奉仕に励みたいと思います。